

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：34315
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2014～2017
 課題番号：26750290
 研究課題名(和文)近代日本における野球文化形成に関する言説史的研究

研究課題名(英文)The Study on the Baseball Discourses in Modern Japan

研究代表者
 西原 茂樹(NISHIHARA, Shigeki)
 立命館大学・産業社会学部・非常勤講師

研究者番号：60722767
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、近代日本における野球文化の形成について、野球が定着していく過程で生成し定着した「精神野球」「武士道野球」「野球道」といったキーワード、あるいは甲子園野球などのイベントをめぐる言説を題材として解明し、それによって従来の野球史像の見直しを図ることであった。本研究が明らかにしたのは、戦後における「野球道」言説の主要な担い手として元巨人軍監督の川上哲治が挙げられること、そして1970代において「斜陽化した」プロ野球との対比で甲子園野球の価値が相対的に上昇し、それによって「教育の一環」というスローガンが正統性を得たことが「野球道」言説に対する支持を広げる基盤となったことである。

研究成果の概要(英文)：This study sets out to make an analysis on the discourses concerning the formation of the baseball culture in modern Japan, and thereby to come to have a better opinion of the conventional images of a history of baseball in Japan. The following two viewpoints could be pointed out as a result of this study. First, a main person who bears a responsibility for the discourses of “yakyu-do” post-World War is Tetsuharu Kawakami, the former manager of the Yomiuri Giants, and a value of the Koshien Baseball Tournaments rose relatively in the 1970s in contrast to the “declining” Professional Baseball, and thereby a slogan of “part of education” got legitimacy and supporters of the discourses of “yakyu-do”.

研究分野：スポーツ史

キーワード：甲子園野球 野球道 精神野球 武士道野球 メディア 言説 プロ野球斜陽化論 川上哲治

1. 研究開始当初の背景

(1) 「ベースボールから野球道へ」というステレオタイプ

本研究を開始した時点において、近代日本における野球文化形成に関する先行研究のほとんどは第一高等学校（一高）早稲田、慶應などといった、同世代人口の1%にも満たなかった東京のエリート学生たちの野球実践や思想についての考察にとどまっていた。そしてそれらにおいては、「本来明るい娯楽であるはずのベースボールが、日本において東京のエリート学生たちを中心として受容される過程で伝統的な“武士道精神”や“武道精神”と出会い、その結果精神主義的・勝利至上主義的な信条を濃厚に持った“野球道”へと変貌した」などといったステレオタイプ的な歴史像が主張されてきた。この歴史像は現時点においてもなお強固な説得力を持ち、研究者やジャーナリストなど多くの人々によって言及され続けている。

(2) 野球受容に伴う「娯楽性」への着目

これに対して、こうした歴史像の見直しにつながる研究も21世紀に入ってから少しずつ現れてきていた。たとえば坂上康博は一高野球部員たちをはじめとする明治期の選手たちの言説について検討し、彼らの一見精神主義的な主張が、野球を否定的にみる当時の風潮との緊張関係において発せられていたものであること、また、初期においては野球の持つ娯楽的な側面が彼らの中でも重要な位置を占めていたと指摘する（坂上康博『にっぽん野球の系譜学』青弓社、2001年）。また小野瀬剛志は、スポーツの本質について争われた昭和初期の「スポーツ論争」に焦点を当て、その論争においてスポーツの娯楽的価値を優先する思想が非常に重要な役割を果たしたことを明らかにした（小野瀬剛志「昭和初期のスポーツ論争 『日本的スポーツ観』批判をめぐって」『スポーツ社会学研究』第9号、2001年）。さらに高津勝は、日本における近代スポーツの受容過程での精神的土壌が、従来言われてきた「伝統としての武士道ないし武道精神」にではなく、「出遊」や「物見遊山」といった民衆の伝統的余暇活動にあるとし、その中で健康な生活や自己規律、「楽しさ」や「愉快」「面白さ」を求めて近代スポーツに接近していった民衆の主体的な受容像を描き出した（高津勝『日本近代スポーツ史の底流』創文企画、1994年。同「欧米近代スポーツと民衆 日本における土着文化と外来文化」中村敏雄編『スポーツの伝播と普及（スポーツ文化論シリーズ）』創文企画、1995年など）。筆者はこれらの研究に刺激を受け、甲子園大会をはじめとする大正・昭和初期の野球（スポーツ）イベントの娯楽性に着目した研究に取り組んできた。

(3) 実態としての娯楽性と「精神野球」の強調とのギャップ

しかし、研究を進めていくうちに、当時の野球受容の実態が明らかに娯楽性を伴うも

のであったにもかかわらず、なぜ言説レベルではそれとは対照的な「精神野球」「野球道」が強調され、今もなお「ベースボールから野球道へ」が強固なステレオタイプとして定着しているのかという疑問が、筆者の中に強く湧き起こってきた。日本における野球文化の形成を正しくとらえるには、このような実態と言説のギャップについて正しく説明することが不可欠であると感じられるようになり、今回の機会にこの課題に取り組もうと考えた。

2. 研究の目的

(1) まず、20世紀前半に生成した「精神野球」「武士道野球」「野球道」をめぐる言説が、戦後社会においていかに流通し変容していったのか整理し、それらが依然として日本の野球文化を象徴する用語として支持されているのはなぜかを見極めることを目指した。「精神野球」言説の明治期における生成については先行研究においてもある程度言及されている。しかしながら、それがその後の時代の中でいかなる変容を蒙ったのか（あるいは蒙らなかったのか）、さらに現在に至ってもなお強く支持され続けるのはなぜかといった点についての考察は十分になされていない。言説をめぐる社会的背景は現在までの時代の流れの中で大きく変容してきたはずであるのに、これらの言説が根強い影響力を持っているのはいかなる理由によるのか。

(2) 次に、「教育の一環」「純真」「汗と涙」といった甲子園野球独特のイメージが、現在まで強い影響力を保ち得ているのはなぜかについて、戦後社会の文脈において明らかにしていくことを目指した。とりわけ「教育の一環」は「精神野球」とも深く関連する要素であり、(1)について解明するうえでも不可欠の作業であると考えた。これらイメージの生成がおおよそ昭和初期であることは、筆者の従前の研究において明らかにしていたが、それが戦後に至ってどのように継承されてきたのかという点は未解明であった。甲子園野球が持つ「教育の一環」、あるいは「純真さ」という現実離れたイメージは、時代の変容にも関わらず根強い支持を集め続けている。それを支えてきたのは戦後のいかなる社会的背景や論理であるのか。

3. 研究の方法

(1) 「言説史」という方法論

本研究においては「言説史」とでも言うべき方法論が適用された。筆者はこのやり方によって野球受容の実態としての娯楽性と、言説面での精神性のギャップを埋めることができる考えたのである。具体的には、「精神野球」「武士道野球」「野球道」といった諸言説の生成およびその変容を、これらの言説が埋め込まれていた言説空間の全体や社会的コンテキストを数十年間単位で再構成することで解明していこうという目論見であ

った。

(2)言説=実態か?「言説」から読み取るべきもの

野球(スポーツ)の受容をめぐるこれまでの研究は東京のエリート学生たちの野球実践や思想についての考察に偏り、彼らの残した書物等に「精神修養」「武士道」といった用語が多数登場することに基づいて、日本における「野球道」の形成を説明しようとしてきた。しかし、そもそも「精神野球」「武士道野球」というキーワードの生成・定着は、「娯楽的なベースボールが日本において精神主義的な野球道へと変容した」という事実をそのまま意味するものなのか。

たとえば「オリンピックは参加することに意義がある」という有名な格言があるが、これは初期のオリンピックにおける国家間対立から生じた競技上のトラブルに対する戒めから発せられたものであり、「オリンピックの参加者たちが勝利至上主義を超えて友好的な雰囲気を作り上げた」という事実を意味するものではなかった。このように、言説はそれに対応する現実をそのまま写し取るものとは限らず、それが発せられた社会的・歴史的な文脈や、そこに居合わせた諸主体の様々な思惑の交錯した一つの結果として捉えられるべきものである。

こうした「言説」観に立脚するならば、「精神野球」「武士道野球」「野球道」をめぐる諸言説から読み取るべきは、「娯楽的なベースボールが精神主義的な野球道になった」といった単線的な歴史像ではなく、野球が日本において普及していく過程における社会的・歴史的な文脈や諸主体の思惑の如何といったことであるように思われる。そこから見えてくるものは、野球に関わる諸主体が、野球そのものを日本社会に定着させるうえでの「正統性」を訴えんとして活動した結果、野球をめぐる独自の意味体系が構築されていったということになるはずである。本研究では「言説史」によってそうした諸要素を解明することを目指した。

(3)使用した資料とその収集

本研究は「言説」を主要な資料として行われたため、テーマに関連する文献の収集およびその内容の分析が主な作業内容となった。具体的には、「精神野球」「武士道野球」「野球道」および甲子園野球などのイベントをめぐる言説の系譜を突き止めるため、戦前から戦後に至る関連文献(新聞・雑誌記事や関連書籍等)の網羅的な収集を行い、特に戦後における関連言説の展開とその変容の把握に努めた。その際、資料収集の主な拠点として当初考えていたのは野球体育博物館や秩父宮スポーツ博物館・図書館であったが、後者は旧国立競技場内の施設であったが故に休館を余儀なくされ、さらにこれも当初想定した野球専門書籍・雑誌に加えて、一般の週刊誌や月刊誌などにおいても関連記事が数多く掲載されており、それらを総合的に収集す

るため、国立国会図書館(東京館・関西館:デジタル化された各種雑誌記事を豊富に検索・収集できる)や、日本唯一の雑誌図書館である大宅壮一文庫に足繁く通うこととなった。

4.研究成果

(1)戦後日本社会における「野球道」

2において述べたように、筆者は明治期に生成した「精神野球」「武士道野球」「野球道」をめぐる言説が、とりわけ戦後においていかなる変容を蒙ったのか(あるいは蒙らなかったのか)さらに現在に至ってもなお強く支持され続けるのはなぜかといった点について十分な考察がなされてこなかったと考え、それを解明するべく戦後の野球言説の収集に力を注いだ。しかしながら、その作業は当初想定した以上に難航を極めることとなってしまった。戦後において「精神野球」「武士道野球」「野球道」を論じたまとまった言説が想像以上に少なく、それを発見すること自体に時間を要してしまっただけである。

こうした言説はなぜ戦後において目立たなくなってしまったのか。その主要な理由としては、戦前においては飛田穂洲という「野球道」言説の中心的なイデオログがいて、彼の言論が野球界において大きな影響力を持っていたが、戦後においてはそうした存在がいなくなってしまったことが挙げられる。早稲田大学野球部初代監督を務め、その後記者として新聞・雑誌上で健筆をふるった飛田は「野球は単なる娯楽ではなく精神修養のためになされるべき価値ある営みである」と事あるごとに主張したが、一方で選手や試合をめぐる様々なことについてユーモア溢れる筆致で厳しくも暖かい論評を展開したことによって多くの野球関係者やファンを魅了した。それ故彼の語りは野球言説全体に対して強い影響力を持ち、同種の語り口を数多く生ぜしめたのである。しかし戦後になって飛田が一線を退くと、「野球道」言説は野球言説全体の中で必ずしも中心的な位置を占めなくなってきた。さらに、佐藤彰宣『スポーツ雑誌のメディア史』(勉誠出版)が指摘するように、戦後の雑誌文化においては「野球道」を高らかに謳い上げるような教養主義的野球言説自体が衰退し、替わって野球を専ら娯乐的に扱う言説が増殖していった。こうしたことが「野球道」言説そのものを著しく衰退させ、戦後の野球言説においてその存在をはっきり確認することを困難なものにしたと考えられるのである。

(2)川上哲治の「野球道」論

以上のような理由から、当初目的とした戦後の「野球道」言説の収集は困難を極め、時間をかけてもその全体像はなかなか見えてこなかったために、筆者は本研究を遂行すること自体に対して懐疑的な気分になりかけていた。とはいえ、地道に資料収集を続けていくと、全体としては衰退していきながらも、

飛田から継承した「野球道」言説を、特に高度経済成長期以降において世間に広め、維持することに貢献したとみられる人物の目星を付けるに至った。それは、日本プロ野球初の2000安打達成者であり、読売巨人軍の9時代を監督として牽引した川上哲治の「野球道」論である。彼の野球論は修養主義的色彩に溢れており、評論家・大宅壮一によって「川上は飛田の後継者」と評されるほどであった。

監督としての川上はアメリカ大リーグから学んだ戦術を積極的に駆使したことがよく知られているが、一方でいわゆる「管理野球」と呼ばれるような選手の生活面の厳格な管理に勤しんだり、「哲のカーテン」と揶揄されたメディア報道の制限によって記者たちから煙たがられたりした。そのことが祟って野球ファンや記者からの評価は低かったのだが、一方で監督時代やその後の評論家時代を通じて、「禅」への取り組みをベースとした修養的な野球論を講じた著書を度々刊行し、それは一部で確実に高い評価を受けたと考えられる。采配面で面白みがなくとも、確かな手腕によって読売巨人軍の黄金時代を築いた監督であったことは否定しようがなかった。川上の「管理野球」の方法論はとりわけ高度経済成長を担った企業経営者たちからの注目を集めたと考えられるが、その底流に流れる修養的な野球論も併せて評価され、それが社会的に支持され続けるうえでの基盤作りを果たしたのではない。

このように、V9巨人軍の監督として野球界の中心にあった人物が展開した修養主義的野球論は、教養主義的野球論とは対極的な娯楽イメージを拡散させたプロ野球主体の戦後野球界において「野球道」言説をリバイバルさせ、その後の時代にも継承される契機を作り出したと考えられるのである。

(3)昭和50年代以降における甲子園野球人気の高まり

戦後において「精神野球」「武士道野球」「野球道」言説を維持する役割を担った存在としても一つ外せないのは、やはり「教育の一環」をスローガンとして掲げる甲子園野球であろう。筆者は過去の論文において、甲子園野球が既に大正期において「野球の教育的意義」を主張し始めており、その背景に野球に対して否定的な教育関係者が当時全国に数多く存在しており、彼らを説得することなしには大会そのものが成立し得なかったことなどを指摘したが、その内容は戦前についての考察にとどまっていた。そのため、戦後においてもなお主催者が「野球の教育的意義」を主張し続けたのはなぜかについての更なる考察が必要であり、その作業を進めることによって「野球道」言説の戦後における継承・強化の理由の一端も見えてくるはずである。筆者はそのように考え、戦後における甲子園野球関連言説の分析にも取り組んだのだが、その過程で気付いたのは、昭和40年代まで新聞や雑誌における甲子園大会への

注目度は決して高くなく、報道も試合中心のやや地味なものだったのだが、昭和50年頃を境に大会報道量が一気に増大したのみならず、「教育の一環」を掲げる甲子園大会のあり方について積極的に議論される機会が増えていったということである。たとえば新聞報道においては、主催の朝日新聞をはじめ、一般紙の大会報道は昭和40年代まではせいぜい1日あたり1頁を費やす程度だったのが、昭和50年を過ぎる頃から見開き2頁にまたがるのが普通になる。とりわけ読売新聞の熱の入れようはすさまじく、主催の朝日新聞を差し置いて地区予選を大々的に扱ったり、「全国世論調査」を実施したりする有様であった。雑誌報道においても、昭和40年代までは甲子園大会の話題が取り上げられること自体が少なかったのが、昭和50年代になると記事数が激増し、大会の盛り上がりや華々しく伝える一方で、選手・指導者の不祥事や野球留学などといった高校野球をめぐる諸問題を告発し、そのあり方を批判的に問うような記事も目立つようになっていく。

(4)「斜陽化」するプロ野球との対比による甲子園野球への評価の相対的向上

このようなメディアによる大会の扱いの激変の理由として、まず昭和40年代を通じて高校進学率が90%を超えたことで、特に若い世代にとって甲子園大会がそれまで以上に身近な存在になったこと、またこの時期になって関東代表校の活躍が目立つようになり、大半が東京を拠点とする各種メディアの関心を一層引くようになったと考えられること、あるいはテレビ普及率がほぼ100%に達し、大会の様子がテレビによって隈なく伝えられることで人気に拍車がかかったことなどを指摘することが出来る。しかし、それ以上に興味深いこととして、この時期に「プロ野球斜陽論」が盛り上がりを見せ、一連の議論の中で甲子園野球に関するメディア側の評価が向上していったということである。

「プロ野球斜陽論」は昭和40年代を通じてとりわけ雑誌媒体において展開されたものであった。そこではプロ野球選手たちの真剣さに欠けるプレーぶりが野球ファンの不興を買っており、王や長嶋に続くスター選手も出てこない、さらには球団経営のあり方も親企業の宣伝の域を出ず、それ故巨人ばかりが勝ち続ける状況下において観客動員数やテレビ視聴率を押し下げているといったことが度々指摘され、このままでは当時人気が出始めたサッカーに関心を奪われ、やがてはテレビの普及で斜陽化した映画産業と同様に野球も衰退していくだろう、いや現に衰退しているのだと論じられた。このように、議論は全体としてプロ野球の衰退をクローズアップしたものだったが、その一方で甲子園野球については、対照的に礼賛しようとする言説が目立ち始めていくのである。たとえば、プロ野球ではたった1試合にさえ、2人も3人も投手が交代して、時には、僅か1球

か1球を投げただけで勝利投手になるような気の抜けた事態がしばしば起こるが、高校野球では酷熱の甲子園でほとんど1人の投手が全試合を投げ切るばかりではなく、2試合でも3試合でも、腕も折れよと連投するのであり、そこに野球の真の面白さがあるのだ。あるいは、技術的に見るならば、高校野球はプロ野球の比ではない。それなのに高校野球が人びとをひきつけるのは、ウソや偽りが無いそのひたむきなプレーのゆえである。といった具合に、「プロ野球は斜陽化している」と標榜する一連の言説は「斜陽化している」プロ野球に対する批判と甲子園野球に対する礼賛とが表裏一体となって展開されたものだったのであり、これが同時期における甲子園大会の人気上昇と相俟ってメディア側の関心や評価を高め、結果として「野球は教育の一環である」といった主張が社会において総体的に支持される基盤作りとしての役割を、川上の野球道論などとも並んで果たすことになったのではないかと考えられるのである。

5. 主な発表論文等

4年にわたる研究を通じて、筆者は以上のような見解を持つに至った。しかしながら、これらの内容を研究期間内に論文等にまとめることはできず、今後速やかに作業を進めることが求められる。このうち、4-(3)および(4)については、平成30年度中に刊行見通しの共著本(出版社および刊行時期未定)において論文として公表する予定であり、現在執筆中である。

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西原 茂樹(NISHIHARA, Shigeki)
立命館大学・産業社会学部・非常勤講師
研究者番号：60722767

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()